九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 雑誌「蒙疆文学」の小説群 ： 「蒙疆文学賞」受賞作を中心に

阿莉塔
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494604

出版情報：比較社会文化研究. 17, pp.101-107, 2005-03-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化研究』第17号（2005）101～107
*Social and Cultural Studies*
No. 17 (2005), pp. 101～107

# 雑誌「蒙疆文学」の小説群
## —「蒙疆文学賞」受賞作を中心に—

阿　莉（アリ）　塔（タ）

## I

敗戦三年前に創刊された「蒙疆文学」（日本語版）は、蒙疆文芸懇話会の機関誌として、一九四二年六月五日蒙疆の首都張家口で創刊され、終刊号は不明である。また、赤塚欣二、小池秋羊、南春夫、青木啓、石塚喜久三らの月刊同人雑誌でもあった。「月刊文化雑誌」として出されたが、編集人不足や戦況の影響によって、必ずしも毎月出されたわけではなかったようである。現在、日本近代文学館に所蔵する最終号第三巻第五号（昭和19・8）までは、合計一九冊発行されたことが判明した。しかし、同号の内容や編集後記を見ると、その後も続行される予定があったようである。

「蒙疆文学」の小説群は、大まかに以下の三つに分けられる。最も多いのは、蒙疆を舞台にした「日本人」の生活を描いた作品である。次は、「蒙疆」とは無縁で、「内地」日本を舞台にして描いたものである。もう一つは、軍事事件・戦闘・戦場・従軍体験を扱った作品である。

本論は、現在日本近代文学館に所蔵されている「蒙疆文学」創刊号から第三巻第五号までの不揃いの一四冊（第一巻第一、三、五号、第三巻第三、四号、第三巻第六号以降は未見。論者注）に発表された三〇篇の短篇・中篇小説のうち「蒙疆文学賞」の受賞作ついて考察してみたい。

## II

「蒙疆文学賞」とは、一九四二年蒙疆「文芸懇話会が主体となり、政府弘報局、蒙疆新聞社の後援を得て設定、日、蒙、華三箇国語による民族歌謡、詩、小説の募集をなし、日文は故北原白秋、三好達治、前田鉄之助、上泉秀信、横光利一、川端康成の諸氏にその選を委嘱、華文は銭稲孫、柳竜光、張鉄生の三氏を煩はし、また蒙文は蒙疆新聞社の選として」（『蒙疆年鑑』昭和一九年版、蒙疆新聞社）いた。その結果、短篇小説日本語部門では、入選は石塚喜久三「纏足の頃」の一篇で、佳作は小池秋羊「緑山荘」・八雲郁重「生活」・仲田六郎「初期の経験」・森江栄「鉄橋と少年」・小柳哲夫「芽ばゆるもの」の五篇である。「芽ばゆるもの」を除いて、他の受賞作はすべて雑誌「蒙疆文学」に掲載された。以下、掲載された五篇について考察してみたい。

### 1　小池秋羊の「緑（みどり）山荘」

「蒙疆文学」の小説の大きな素材の一つは、蒙疆に居住する日本人の生活を描くことである。

「緑（みどり）山荘」（以下、便宜上でルビを省略し「緑山荘」と記す）はまさにそのような小説である。また、筆者小池秋羊の最初の小説でもある。小池秋羊とは、明治四〇生まれ、群馬県出身である。本業は蒙疆電業営業課営業係長で、副業は蒙疆文芸懇話会の幹事長で、「蒙疆文学」の同人であった。

木の一本も生えず、肌むけの山々ではあつたけれど、山ふところは街の家並の軒端にすぐきてゐて、この街に住む人々に深い親しみをあたえてゐた。

水量もすくないくせに、ふだんもココア色に、濁り、流れてゐる清水河（・・・）とよばれる河に沿ふて街がひらけ、それを東と西に長城線を背負ふた山波が挟んでゐる。

山波が街の最北端で、両方から急に歩み寄つて、街を縊（くび）つてゐる。街の縊れには、趙の時代に築造されたと伝へられる巨大な城門が、がつしりと構え、せまつてきた両側の山の陵線には、大古の巨大動物のように背ひれをくね／＼とさせて、長城が這ひあがつてゐる。

（略）

門外へ出はずれると、清水河は二つにわかれて、西へそれたほうの渓には、また風変りな部落がひらけてゐる。名を朝陽村とも云ひ元宝山とも呼ぶ。ひと昔まえまでは、この部落から蒙古が始つてゐた。内蒙の多倫（どろん）や、外蒙のウラン・パトールへ通ずる貿易ルートの終点であり、このまちとの物資流通の交易場になつてゐた。

（略）古い習慣を大切にまもる土着民たちのあいだゞけで、相変らず駱駝や蒙古馬などの泊り宿として、朝夕をうらぶれた蒙古風に彩つてゐる。ゆきずりの視察客などが決つて案内されるのもこゝで、このまちにとつては『陸の港』の旧跡に属する名所である。

（略）

この街は知られてゐるように、北京などにくらべてはるかに高原の、標高二千五百尺と称する高燥の土地で、夏もなほ爽涼の気深いのである。ところが季節の変り目ごとにやつてくる蒙古風だけは何とも粛殺たるもので、ことに春さきから初夏へかけての胡砂をふくんだ朔風ときては、あらかたの生きものたちを憂鬱にする。

これは、「緑山荘」の冒頭部分であり、小説の舞台となる蒙疆の首都「張家口」の風景を描いている。このやや長い引用文には、日本人に馴染みのない地名ばかりが紹介されているが、これを読んだ後、張家口に対するいくつかの知識を得ることができる。高原にあるこの街は、広々とした大陸のイメージを待たず、意外にも狭い「山ふところ」に位置している。山だけでなく、「清水河」という川が市街を流れていく様子も描かれている。「清水河」とは、この小説においてつくられた名称で、張家口に実在する「清河」のことを指し、有名な「永定河」の上流たるものである。「巨大な城門」とは、張家口を最も象徴するものである「大境門」を指し、外長城線の関門をなしている。また、何気なく触れた「元宝山」とは、実はかつて内・外モンゴル交易の取引市場としての栄光の歴史を持つ場所であり、日本人が来る前にロシア人の居留地でもあった。張家口のモンゴル名は「カルガン」と言い、引用文のなかの『陸の港』という意味を表す。「蒙疆文学」の小説群において、これほど詳細に張家口を描写するものはない。これで、張家口の地理上のいくつかのポイントが描き出され、これらは「蒙疆」を表象するキーワードともなる。風景の描写に力を入れている点は、この小説の大きな特徴であろう。

「緑山荘」の舞台は、「張家口」に代表された「蒙疆」であり、旅行者や視察者が「純粋なモンゴル草原の遊牧地帯で羊を追う遊牧民が生活する」とイメージする「蒙疆」とは異なった姿を持っている。現実的には「張家口」には、漢民族がほとんどで、モンゴル人がわずか一割足らずしか生活していない。その場を読者がモンゴルのイメージに重ねてしまうような場面設定はやや皮肉である。これは、張家口に日本人居留地が設けられていることに深く関係するのではなかろうか。

「緑山荘」のヒーローは、「緑山荘」の経営者である佐田嘉太郎である。一般人は「張家口」は黄砂に悩まされる街だと考えているが、佐田は、張家口という街に熟知している人物で、清水河の渓部にある朝陽村＝「元宝山」は「深い山懐に抱かれてゐるだけに完全な無風帯で、春の蒙古風季節でも、別天地をなしてゐた」ことを知り、更に白系ロシア人の経営するサナトリウムからヒントを得て、そこで外国人目当てに「避暑山荘」を経営しようと妙案する。

ところが、この小説は、佐田の経営談という一本筋に沿って展開してはいない。小高勢以子という女性とのやりとりも多く描かれている。佐田は、ただ独りの民間経営者ではなく、「××経済統制協議会」の主事を務める政府の官僚役もしている。小高勢以子は、二年前にこの協議会の事務員に採用されたのがきっかけで彼と出会った。「日支事変」、つまり一九三七年の「盧溝橋事件」を契機に、内地から大陸へ就職を求めるブームが起こり、小高勢以子もそのような波に乗り、ただ「大陸のなんとも云ひ知れぬ魅力にあこがれてゐた」一人である。

佐田は四〇に近い妻子のある身である。小高勢以子の出現によって、二人は、きっと情愛に溺れどろどろした関係になるだろうという読者の推測を裏切り、二人の関係はなかなか熱烈な愛情という「私小説」風にまで発展しない。佐田の言葉を借りて言うと、「俺は生理的なことや、それから所謂愛情の世界では妻との生活で、十分満足してゐるんだよ」と。彼が勢以子に求めたのは、彼女の才能である。勢以子は絵が好きで、色に対する感覚は「天才的なひらめきがある」。仕事も男まさりで、たとえ「K鉄路沿線の各都市の物価指数に対する比較調査」のような単調な仕事に対しても興味を持ち、グラフの統計から「数学の上の文学」と感じ取れるほどの余裕を持つ。彼女の聡明さに比べて、佐田は野心を持つ一方、自分に対して自信を欠く一面がある。「佐田は絵は描かないが、下手な小説を書いた。しかし、満足なものは一つも書けなかつた」と作者はかつての佐田に自分を重ねているような描写もしている。佐田は「兄さんのは、いつも常識的すぎて、面白くないのですよ。芸術つてものは、もつと常識以外のものがなくちやア」と弟の「大摑みな批判」にショックを受ける。それを作者の「本当の苦悩」であると推測すると、意外にこの小説の意図が分かるような気がする。つまり、作者は、作中人物の佐田と勢以子の関係を、浮気をする男女というありふれたモチーフに結びつけることを、意図的に避けているのではなかろうか。

彼女には佐田に欠けているものがある、と造型されている。彼女の斬新な考え、繊細な感覚に対して、佐田は心を惹かれる。彼女は、まさに佐田の理想的な頭脳である。だから、彼女を愛人としては描写されておらず、佐田の分身のようにしか描かれていない。

勢以子を発見してから、佐田は、今まで眼まぐるしい仕事のために忘れかけてゐた、彼の本来の――彼自身の意欲によれば、それが彼の本来のものだと云ひ切りたいところの、芸術に対する関心が再び燃えたつてきた。

やがて、勢以子が北京の美術専門学校に入学する。佐田は、半「国策会社」の「××経済統制協議会」を退き、一

民間人になる。その時から、彼は本格的に「緑山荘」の経営計画を実施しはじめる。彼は「大境門外の元宝山に普請を始めましてね。外貨獲得が目的ですよ。日本の軽井沢、中支の廬山、蒙疆の元宝山、といふ寸法なんですよ、もう三十人ほどの毛唐と契約してありますので、今年の夏から『避暑山荘』を開きます……」と宣伝を始める。夏になると、佐田は、予定通り「緑山荘」の経営者となり、白系ロシア人のエフレモフ夫婦に支配人をしてもらい、支那人のボーイやコックを「駆使してゐる」。客は外国人ばかりで、「北京、天津のちよつと小金をもつた、海では刺戟が強すぎると感じるような、病弱の人々がおもだつた。上海あたりから遥ばるやつてくる猶太人もゐた」。

勢以子も、夏休みにわたって一ヶ月を「緑山荘」で過ごした。彼女はだんだん佐田に普通の友情を超えた感情を押さえきれなくなるが、佐田は「自分にはまだ情事などで費す生活のほかに、人生がある筈だ。大陸へ何のためにきたのだ」と欲望を抑圧する。

秋になり、避暑の宿泊人たちが、「緑山荘」を去っていく。勢以子も北京へ帰って映画会社「北支電影公司」に就職してしまう。冬の「緑山荘」は、予定どおり、「サナトリウム」へと変貌し、三、四人の患者を収容する寂しい山荘となるのであった。

### 2　八雲郁重の「生活」

八雲郁重「生活」は、第二巻第二号に掲載された。日本人の在蒙生活を描いた作品で、一読する価値がある。この小説では、無理に蒙疆の異国情調にばかり着目した不自然な小説とは違い、日本人という移民の日常生活の一側面を「ありのまま」書いたところに、魅力を感じる。

夫の一条良平は、「一しきり蒙古風の吹きまくつた後のザラ付いた街」張家口で単身赴任の会社員であり、また「東慎一」というペンネームを持つ詩人でもある。彼はいつも立ち寄っている本屋さんのマダム弓枝に好意を寄せ、いつの間にか二人の関係は、一緒に外食をするまで発展していく。しかし、一条良平は、弓枝が「未亡人で子供が内地に一人ある」、「内地で喫茶店や酒場を経営して夫の遺産を殆ど失つた」が、今は「某洋行の主人の妾」であることを、弓枝と一緒に暮らしている彼女の姪の清子から告げられてから、弓枝に対する興味は一変し、彼女の逸聞は創作の格好の材料になるのではないかと考えるようになる。清子は、叔母弓枝とは「性質も境遇も全然違ふ」。容貌は「遥かに弓枝に劣つた」が、「肢態の整つた健康な娘」である。彼女も、叔母のように良平に好感を覚え、「良平にだけは純愛を捧げてゐる」と告白する。良平は二人の女性から手紙や恋文を渡されたりするようになる。

このような生活をする良平は、すっかり北京にいる妻子の元を訪れるのを怠ってしまう。妻の桐代は息子の靖洋を連れて北京に住んでいる。一条夫婦は別居生活をするのは、別に夫婦の仲が悪いわけではなく、社宅がないので「良平の勤める会社は別居手当を出してゐたから、手当ほしさに別居してゐる者や、子女の教育機関の無いために内地或いは北京などに、別居を余儀なくされてゐる者も、どれだけ多いかしれなかつた」という理由からである。この夫婦の間に、不安と不信感が生じる。

ある日、良平一家は先輩の高木一家に遠足に誘われ、このことは別居生活に終止符を打つような決断をするきっかけとなっていく。高木夫婦は、すっかり張家口に馴染んで幸せそうに暮らしている。「殺風景な張家口に来て黄塵と共に住んでゐる中に、何といふ潤ひのないカサ〳〵の心になつた自分であろう」とくよくよする妻の桐代に比べて、高木夫人は「こちらに来たからにはこちらの野菜を食べなくちやねえ」と前向きの態度をあらわす。桐代は高木夫婦の生活態度に感銘を受け、狭い住居の困難を乗り越えて夫との同棲を始めようと決心する。

> 自我を通したい一人のために、家を乱し人格を傷け合ふ事こそ、国家への不忠実になるのではあるまいか。堅実な生活にこそ人間の生命が強く育くまれるのだ。喜怒哀楽の全てを共に味はつてこそ一家庭の、生活の意義があるのであつた。それが生活であつた。

というのは、小説の結末である。「国家への不忠実」云々を除けば、少し説教臭いが、なるほどと首肯する結びである。

### 3　仲田六郎の「初期の経験」

仲田六郎の「初期の経験」（2巻1号、昭和18・1）は、先輩の河野氏を頼って、故郷のN市から陥落三年目を迎える蒙疆の首都張家口にやって来てしばらく暮らしていた「私」の蒙疆生活の初期の経験を回想風に語る作品である。

「私」という男は、一応支那事変は日本の領土拡張のためだという国益を重視する一般的な認識を持っているが、実は政治に無関心である。「蒙疆」にやってきたにもかかわらず、「蒙疆の民衆」をやたらに「支那民衆」と呼び、「蒙疆」と「支那」の区別もつかないほど蒙疆新政権の誕生に鈍感である。「私」は「矢張り支那人の街なのでどうしても支那語が必要ではないか」と「知識人」の素直な考えを持っているが、「苦労して三等国民の言葉など覚へなくとも大丈夫よ。大抵のことは日本語で通じるやうになつて行くわ」と友人河野の夫人に教えられる。このように「私」は河野一家とつき合い、河野家に尋ねてくる人たちから蒙疆の見聞を色々と聞かされる。「私」が自分の目で見た「蒙疆」（時には「支那」にかわる）も描かれている。

やがて、「私」は、除隊兵の藤井の一室を借りることになり、藤井と彼の愛人のことを中心に描くようになる。藤井は愛人との関係について「一年後には正式に一緒にならうと言ふ約束が出来てゐるのだ」と真剣に考えている。まもなく、彼は蒙疆の西部都市包頭よりももっと「西北の方にある、敵軍の最も有力な根拠地であると言はれる、危険なG」地へと出張するように命じられ、そのまま「戦死」してしまう。しかし、彼の「戦死は確認されず、結局行方不明者の一人として処理されることになつた」のだ。

このように、蒙疆を舞台にした「回想風」の小説の大きな特徴は、「蒙疆人」不在の物語を延々と語っていることである。「蒙疆人」という固有名詞はないが、ここで敢えて「蒙疆政権」によって管轄された地域の「現地人」のことを指すことにする。

一人称の「私」という人が誰であろうかとはさほど重要ではない、重要なのは、「私」の目を通して「内地」の人に「外地」の「実情」、外地の「現地人」の生活ではなく「日本人」の生活を伝えていくことである。このような語り口は、いわゆる蒙疆人という「現地人」を「読者」として想定せず、常に蒙疆在住の「日本人」が内地在住の「日本人」に向かって語っているのであり、「他者」認識を欠いた文体である。

もし、「初期の経験」では、このような文体の特徴はそれほど顕著でないとしたら、小柳哲夫の「黄土をけづる」からは、強烈に感じ取ることができる。

小柳哲夫の「黄土をけづる」は、第二巻第五号（昭和18・5）に掲載され、「張家口」における苦力の初夏の一日を描いた作品である。登場人物は、皆固有名詞を持たず、「私」「私達」と「苦力」「彼ら」「華人」という「日本人」対「現地人」という単純な構図によって成り立っている。

「私」は、某日本人女学校を建てるため、同じ工事現場で働く「苦力達」に接触し彼らを観察する機会を得た。外見からみると、彼らは「知性のない顔付」をしている。手と顔は「想像出来ない程に黒い」が、肌は「ビツクリする程に白い。それは病的な白さである」。靴を穿かないのがほとんどで、「華人は元来素足を見せない人間」であるという「私」の常識に背く。休みの時は、彼らはシラミ取りを始める。「着物についてゐるシラミを着物から取り去つてからツブす」という「私」の知っているやり方と違い、「そのまゝ着物と一緒にツブす」のである。また、蠍で遊ぶ連中もいる。「この縛られた蠍と、苦力とに何か似通つたものが感ぜられる」のだ。

しかし、「私」は、決して「彼ら」の外見ばかりみているわけではなく、「良き皇国の子」が教育を受ける「美しい強い建物」を建ててくれた彼らの「恩」を忘れてはならないと自覚する。なぜなら、「正しき日本人とは「恩」を知る人間でなければならない」からである。「私達日本人の人間観が、この時代に生き、しかも生きる価値ある人間である為には、この人間達にさえ正しい評価を忘れてはならないのではないか」と傲慢的な態度で反省する。「苦力」に生きる価値があるかどうかという疑問を投げる「私」は、「恩」を忘れたら良い日本人ではないという「自覚」から、彼らの「恩」を認めるようになる。決して、「彼ら」という「他者」を理解しようとしたのではなく、あくまでも「私」は「日本人」なのでそうすべきだという「自負」によるものである。「私」は「私」という「個人」ではなく、「生きる価値ある」「日本人」の代表であるのに対して、「苦力」はただの肉体労働者ではなく、「華人」を代表させるのである。このように露骨に「他者」を見下ろして語っている文体は、たとえ「苦力」という「他者」を小説のなかに登場させたとしても、「苦力」の内面を描くことができず、「他者」不在の物語にすぎないのである。

### 4　森江栄の「鉄橋と少年」

森江栄の「鉄橋と少年」は第二巻第一号（昭和18・1）に発表され、＜鉄橋警備隊＞炊事場で炊事の手伝いをする少年楊四芳と、下士哨の町田という兵隊とのやりとりを中心にした小説。被占領地域の物語を、すべて被害者と加害者の視点で読むと、この小説の面白さが分からない。権力関係によって生じた敵対関係は被占領地の全ての日常風景ではなく、切ない人情が描かれているところは、この小説の一つの魅力かも知れない。

どこの＜鉄橋警備隊＞だか分からない。某高射砲隊の＜炊事場＞の朝の＜日常風景＞。

> 炊事場の傍で洗面する兵隊、湯気のモウ／＼と立ち昇る大釜より飯をバツクに移す苦力、そして炊事場一体に漂ふ美味しさうな味噌汁のにほひ。その日衛兵に上番する兵隊達は顔洗ひに来る度に、その朝の味噌汁のにほひに——故郷の家に居つた時野良仕事に行く前の朝餉の楽しい時を思ひ出し、健康な味噌汁のにほひに、その日の任務への情熱を駆り立てられるのである。兵舎内で、飯を各人の食器につぎ始める頃、二重のブリキ缶に入れた味噌汁と飯とを、天秤棒で背負ふて、楊四芳少年が、兵舎より鉄橋の両岸の下士哨のところまで運ぶ。

かつての敵国である「支那」は、今は日本軍の占領地となり「蒙疆」という「国」となる。このような異国の土地で任務を果たす「日本兵」にとっては、味噌汁は「その日の任務への情熱を駆り立てられるのである」ばかりではなく、深い郷愁を誘い彼らの「内面」を表象するものにもな

るのである。このような「場」において「少年楊四芳」が登場する。苦力であるこの少年の仕事とは、朝食を「兵舎より鉄橋の両岸の下士哨のところまで運ぶ」ことである。

旧正月が近づいてくるある日、楊四芳は、親戚にやるおみやげとして「一箱二十個入」もの煙草を買ってくれと父親に「買い物」を頼まれた。日本兵を通して買ってもらうと相当安いからである。少年はこの厄介な遣いを誰に頼めばいいかと少々悩んだ末、「日頃一番心安くしてゐる」町田という兵隊に頼もうと決心した。そのやりとりを彼と町田の会話から抜粋してみよう。

「小孩、甚麼」
「今天、給我買タバコ」「你給我買々！」「対々、二十個我要的」
「為甚麼的、那麼要」「行々、今天去買」

これを日本語に訳すと、

「坊や、何。」
「今日は、タバコを買ってもらいたい。」「私のために買って下さい。」「はい、その通り、二十個必要です。」
「どうして、そんなにたくさん要る。」「分かった、今日買いに行くから。」

無論、二人の会話の間に、例えばタバコを買うためのお金「蒙疆銀行の五角紙幣と満州国の一角白銅貨三枚」を渡した、タバコを二十個も必要な理由は「旧正月のつかひものにする」ためである等々場面説明の描写もあった。「日本兵」の兵舎という場は、まさに「被占領地の住民」と「占領側の敵」との一番の緊張関係を持つ「場」であるにもかかわらず、そこには、そのような敵対関係の構図は全く見られず、ふつうに平和な日常生活が行われているようにしか見られない。

町田と楊四芳とはお互いに親近感を抱いている。町田の目に映った楊四芳は、「無口で」、苦力達に最も敬遠される鉄橋警備隊へ飯運びの仕事をしている「人の良い」少年である。また「敷布を楊少年に洗つて貰つたので、そのお礼として、十銭を呉れたが要らぬと言ひて、どうしても受け取らず、仕方なく十銭を町田が受け取ると、それで安心したと言ふ顔付きで、口数の少ない性質故黙つて唯丸い大きな黒眼を嬉しさうに輝やかしてゐた」という触れ合いも描かれている。

しかし、このような兵舎には、もう一つの「日常風景」がある。兵隊が苦力を殴る日常。楊少年の代わりに兄が替わって朝やって来たとき、それが無断だったという理由で、「兄」が炊事場の兵隊に怒られ殴られる。また、ある日、楊四芳も濡れ衣を着せられることになる。「炊事場で食器を一つ苦力が紛失した」のがきっかけで、「兵隊の梶上」がその場にいた「大人の苦力の白陶林と楊四芳」に責任追及したとき、楊四芳は「口下手のため」梶上に蹴られてけがをする。

小説の終わりには、楊四芳が首にされた後の町田の心境の変化が描かれている。以前、町田は歩哨に立っている時、「飯を運んで来る楊少年の姿を遠くに目に止めた時は何時も、人待ちごころで少年の来るのを待ち、何か少年の姿をみると淡い歓びを感ずるのであつた」が、今は「秘かな少年に対する気持ちの張合は感じなくなつてしまつた」。また、町田が、いつもと変わらぬ朝食を食べる時も、「此を運び、此を料理する苦力の中に楊四芳を失つたのかと思ふと、食物の味まで変つたやうに思はれた」。町田は、このような切ない思いで、「「楊四芳！」衛兵所の裏の白樺の林に向いて、一声叫んでみた。すると訳の判らぬ怒りの気持ちは段々と静まつていつた」。

その他に、占領地にいる軍隊生活をテーマにした小説は、丘土筆の「代用通訳」（2巻3号、昭和18・3）があげられる。「代用通訳」のあらすじを紹介する。山岡一等兵である「私」は、百武部隊隷下で、昭和一四年九月から二ヶ月間の「支那語の修行教育」を受けて、○○分駐警備隊の代用通訳となる。しかし、私の支那語は全然通じない。したがって、勤務のない日のほとんどを、支那人の部落に飛び込み支那語の修得に励むことにする。その体験を描いた小説である。占領地にある「日本軍」の日常生活が別の視点で描かれている。

### 5　石塚喜久三の「纏足の頃」

「現地人」のみを登場人物にした小説は、「蒙疆文学」においてはわずか数篇しかない。特に、「纏足の頃」のような蒙古族と漢民族間の葛藤をテーマにした作品は、極めて稀である。

「纏足の頃」という短篇小説においては、蒙古人の父親と漢民族の母親及び五人の混血の子供を持つ家庭のことが描かれている。漢民族と蒙古族との間の葛藤を二つの線に沿って展開させている。一つは、家庭内において、次女の纏足をめぐって「支那人の母親」と「蒙古人の父親」との意見の対立によって行ったトラブルである。もう一つは、部落内において、「支那人の地主」と「混血児の長男」に代表された詐取と反抗の闘争である。

この小説の背景には、近代に入って内蒙古草原が開墾され、漢民族の農民が大勢移住し、モンゴル人の遊牧生活が大きく変えられたため、草原を失った一部のモンゴル人は農耕生活に迫られてしまったという「歴史の事実」がある。

母親の「鳳琴」は、漢民族であるが、纏足しなかったので、貧しい蒙古人の嫁になる。父親の「チユルガン」は、纏足する習慣を持たない蒙古人の価値観で、長女「潤芝」に纏足を施すのを強く反対した。そのため、「二十になつても、此の村でまともな暮しをしてゐる支那人は、それこそ鼻汁もひつかけてくれない」。したがって、母親は次女の「李艶」に纏足を決意する。纏足する娘は、漢民族の社会では裕福の家庭の嫁になることを意味するからである。一方、長男「奎栄」は、地主金毓桂の詐取によって「食ふや食はずの暮し」をしている部落を救うために、部落民の団結を呼びかけるが、地主を恐れて彼の必死の呼びかけに応じるものはなかった。孤立された奎栄は、それでも立ち上がって部落の更正のため行動を続ける。

石塚喜久三「纏足の頃」は、第二巻第一号（昭和18・1）に掲載され、昭和一八年度の「蒙疆文学賞」第一回の入選作に選ばれ、更に第一七回（昭和18年上半期）芥川賞を受賞することとなる。また、芥川賞の受賞に伴い、「文芸春秋」（文芸春秋社、昭和18年9月号）にも掲載された。更に、敗戦後、新鋭文学選書としての短篇集『花と海』（大日本雄弁会講談社、昭和23・9）に収録される。著者の石塚喜久三は、一九〇四（明治37）年生まれ、北海道小樽出身である。一九四〇（昭和15）年渡蒙し、華北交通張家口鉄路局に就職しながら、蒙疆文芸懇話会の幹事を務めていた。

「纏足の頃」についての批評と研究は、わずかしか行われていない。蒙疆文学賞の受賞にあたって、上泉秀信と横光利一が選評を寄せている。上泉秀信は「選者の言葉」（2巻1号、昭和18・1）において、「蒙古人、華人、その混血児と、三者三様の特殊な感情を抱いて生活する様態が、極めて強い色調で表現されてゐて、捨てがたい味ひを持つてゐる」と述べ、横光利一は「選評」（2巻2号、昭和18・2）では、「蒙古といふものを、一眼で僕らに眺めさせてくれる所が、この作の価値です」と言っている。

更に、「纏足の頃」は、芥川賞を受賞したことによって始めて「内地」に紹介される「蒙疆の作品」として注目される。川端康成は選評において、「技量は従来の芥川賞の作家に未だ及ばぬのである」が、「とにかく内地に紹介したい作品だと考えた」と述べている。三氏の選評は、いずれも「内地」日本人という読者の立場に立って行っていることは言うまでもない。言い換えれば、「纏足の頃」は、蒙疆或いは蒙古についてよく分からない「内地」日本人という読者の求める「蒙古らしさ」に応えた恰好の作品だと評価されている。

戦後の長い間、「纏足の頃」についての研究は、他の植民地文学と同様に行われることはなかった。一九九〇年代に入ってはじめて、川村湊の「蒙疆の人」（「文学界」平成8年11月号、文芸春秋）によって、その研究を開始されるようになった。川村は主に小説の内容、背景及び作者の実生活との関連などについて論じている。また、拙作「「纏足（チャンズウ）の頃」をよむ」（「比較社会文化研究」第15号、九州大学大学院比較社会文化学府、2004・2）では、作品の創作性に着目し、構造と文体について述べてみた。

実は、「纏足の頃」についての最初の評論は、既述した三氏の選評ではなく、本誌第二巻第六号（昭和18・8）に掲載された青木啓の「人と作品－石塚喜久三氏－」と題する同人批評である。その一節を紹介しておく。

> これら二つの作品（「北方受胎」と「纏足の頃」を指す、論者注）の世界は、何れも作者の世界ではないといふこと。従つて痛ましいまでの作中人物間の苦悶と葛藤は、それらの人々の肉を通じてのそれとは感じられず、作者の恣意によつて設けられた幾つかの類型的な駒が、一すじ感情の激浪をひたよせてゐるに過ぎず、それらの悲憤と憤怒は、何れも作者自身の概念を離れ切つては居ないやうに感じられた。特に、これらの作を貫通して流れる倫理的な強臭は殆んど作者の素朴な主観的正義感を露出して居り、人物と筋のリアリテイを稀薄なものに歪めてさへ居るやうである。（中略）特に農民である作中の人々が口にする会話の中に、これはまたおや／＼と思はせるほどの大弁論が滔々と迸り出てくるのは、いさゝか呆れるほどの書き放し方ではあるまいかと思はれた。

と誠に痛快な批評を行っている。「纏足の頃」は、蒙疆文学賞を受賞したにも拘らず、同人からの厳しい批判を浴びている。同人の目から見た「纏足の頃」は、決して蒙疆の実際の生活を書いたものではなく、「作者の恣意」、つまり想像上の産物のような意味での「特異」の作品に違いない。

石塚喜久三の＜蒙古物語＞の第二作は、中篇「花の海」（3巻5号、昭和19・8）である。小説の舞台を蒙古の大草原に設置した「花の海」は、＜純粋なモンゴル人の遊牧民＞が＜狡猾な漢民族の商人＞に詐取される視点から、蒙古人が漢民族の迫害を受けているという「纏足の頃」以来のテーマを扱った作品である。彼の創作意図は、何よりも「蒙疆らしさ」を描くことによって、自分を「蒙疆の作家」としてアピールするところにあるに違いない。また、蒙古人を庇う彼の目線には、蒙古人を啓蒙しようとする「日本の知識人」の責任感からくるものが含まれていることも看過できない。

森江栄の「密輸」（2巻5号、昭和18・5）も、「現地人」のみを登場人物にした作品であり、一二歳の女の子「秀文」の目を通して彼女一家のことを描いている。秀文は母と兄

と三人で張家口で暮らし、父親は家族と離れて北京で暮らす。このような生活は五年も続いている。秀文は煙草工場で働く便宜を図って他の人と同じように毎日煙草を二、三本盗み、家計を立てる。ある日、彼女は、盗みが見つかったのをきっかけに仕事を辞めてしまう。まもなく、父は、秀文を北京見物に連れだした際、彼女に阿片の密輸をさせる。二回やったが二回とも成功する。それで父は金を儲けるようになり、北京での愛人と別れて帰郷することにする。一方、母は、父がいない間に他の男と肉体関係を持ったこともある。秀文は、こんな両親に対して愛と憎悪の混じった複雑な感情を抱いている。

同じく「現地人」を登場させた作品であるが、一味違う。「内地」の読者にとっては、「纏足の頃」のように強烈に「蒙古」の匂いを放っている作品に対して、「密輸」は極めて地味で中国社会のどこにもあるような有り触れた物語にしか映らなかったであろう。

## III

蒙疆の日本語文学は、戦後、世の中にほとんど知られていない。作者の陣営からみると、ほとんどアマチュアで、創作を本業にしていない無名の人たちばかりである。唯一有名になったのは、石塚喜久三である。彼は、芥川賞を受賞したため、その名を「内地」に知られるようになり、一躍して蒙疆文壇を代表する作家ともなった。また、創作上では、蒙疆文学は、「現地主義」を重視することを最も大きな目標としていた。

蒙疆文学の全てが私の今後の研究課題となっているわけだが、国策文学か否かという「植民地文学」研究上の単一の規範を打開し、一つ一つの作品を具体的に考察する地道な作業が必要である。その前に、何よりも雑誌「蒙疆文学」の全貌を明らかにするために、創刊号を含めた欠号を収集し、全冊を揃え整理することは、目下の急務である。